BLIZZARD ENTERTAINMENT

OVERWATCH



規律と正義

JUDE STACEY 著

ストーリー
JUDE STACEY

イラスト
ANAND RAMCHERON

シニア・ディレクター、ストーリー&フランチャイズ デベロップメント
VENECIA DURAN

シニア・マネージャー、ライティング&ブックス
MATTHEW COHAN

エディトリアル・スーパーバイザー
CHLOE FRABONI

エディター
SHANNON WATTERS

シニア・ブランド・アーティスト
SOPHIE ERB

シニア・プロデューサー
BRIANNE MESSINA

プロダクション
TAKAYUKI SHIMBO, JT TORREA, QIANNAN ZHANG

ゲーム・チーム・コンサルタント
JEFF CHAMBERLAIN, MIRANDA MOYER,
NESSKAIN, JUSTIN RICHMOND, DION ROGERS

日本語翻訳
WATARU HIRATA

Blizzard.com
© 2026 Blizzard Entertainment, Inc. Blizzardおよびblizzard Entertainmentのロゴは、米国およびその他の国におけるBlizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。
Published by Blizzard Entertainment.

このストーリーはフィクションです。本作品に登場する名前、キャラクター、場所、出来事は、著者または作画者の想像による産物または架空のものです。実在する人物（存命中または故人）、出来事、団体、場所に類似するいかなる描写も、風刺的な意図はなく、偶然によるものです。
Blizzard Entertainmentは著者や第三者のウェブサイトもしくはそのコンテンツを管理しておらず、またそれらについて一切の責任を負いません。



規律と正義

IJCのドロップシップがジブラルタルに着陸した時、私はこれから起こりうる光景を頭から追いやろうと必死だった。私のIJCでの証言は……やはり感情的すぎた。あの証言台で不覚にも気持ちが昂ってしまったことを思えば、ここで同じ失敗を繰り返すわけにはいかない。

それでも……あの場で私が告げたことに嘘偽りはない。たとえIJCが批判的に見ようとも、私はコマンダーとして下すべき命令を下したまでだ。振り返れば、私がオーバーウォッチに加入した時、ジャック・モリソンが「優れたリーダーの定義とは何か」と尋ねてきたことがある。私は迷わず、自ら定めた規律を全うできる者が優れたリーダーであると答えた。定められた手順（プロトコル）に基づいて行動することこそが成功の鍵と信じてたからだ。

もちろんジャックは否定し、私にこう返した。規律と人の命、その2つの板挟みになったら、自分は必ず後者を選ぶと。その後、オーバーウォッチは混乱の一途をたどったものの、その非が彼にあったかといま問われれば、肯定するのは正直難しい。

私はペトラス法の公聴会でオーバーウォッチの実情を証言し、ルールを捻じ曲げ続けてきたジャックはその代償を払うことになった。たとえその動機が高潔であろうと、それだけでIJCを納得させることはできない。そして皮肉にも、私はその不文律を数日前に、同じ証言台で思い知らされた。

たしかに、オーバーウォッチはIJCに認められた範囲を超えて作戦を展開してきた。でも、そんな真似ができたのも、信頼できるエージェントたちがいたからだ。コールはグランド・メサで、デッドロック・ギャングの面々を敵に回して基地を守ってくれた。かつて絆を誓い合った旧友たちを差し置いてだ。ゲンジの遠征も未許可

だったとはいえ、彼が東京に潜入してくれたおかげで、私たちは精霊（アニマ）武器のタロン全部隊への配備を阻止できた。釜山で大勢の命を救うことができたのも、D.VaのMEKA部隊との繋がりがあったからこそといえる。そしてローマでの作戦も……もしあの時、オーバーウォッチが現地へ赴かなかったら、被害はあの程度で収まらなかったはずだ。ジャックはたしかに多くの過ちを犯してきた。でも、今回のタロンとIJCの一件を経験して……私も理解した。難しい決断を迫られた彼の目には、信じるべきものがはっきりと見えてたのだと。たとえ、オセイがこれから私に何を言おうと、守るべきものを守った私に後悔の念などない。

いまトレーサーが私の後ろで、作業を中断した私の代わりにエージェントたちを各々のドロップシップへと案内している……この基地から永久に去るための船へと。ジュノとミズキ――帰るべき家がない彼らルーキーはどうなるのだろう。そしてウィンストンにエコーも。IJCが彼らを放っておくとは到底思えないとはいえ、そうした不安が頭をよぎってしまう。

「事務総長、こんなにも早くまたお会いするとは思いませんでした」オセイがドロップシップから降りてくるなり、私は言った。

「私もよ」

彼女も決まりきった言葉で答える、まるでこれまでの出来事が何もなかったかのように。彼女はオーバーウォッチの終焉を見届けにここへ来たのではないのか？

「ヴィヴィアン、少し歩きましょうか」

「基地からの撤退はまもなく完了します。まもなく最後の一団をここから――」

「その必要はないわ」オセイが言った。

私は受け身に徹する。「それはどういう意味ですか？」

「IJCはオーバーウォッチの活動許可を延長する決定を下したわ」

その言葉に私は思わず立ちすくんだ。いくら何でも、そんな都合のいい話を信じることはできない。

「先走らないでちょうだい。今回の延長は……条件付きよ」

なるほど。それならある程度、納得がいく。

「グランド・メサでオーバーウォッチとヘリックス・セキュリティーズの共同作戦が上手くいったというあなたの証言をもとに、IJCは両者の正式なパートナーシップが相互にとって有益と判断したの」

ヘリックス――どのような犠牲が伴おうと自ら定めた規律を押し通すことにかけて、たしかに彼らは専門中の専門だ。

「そうでしたか」





「今後、ヘリックスの司令官がオーバーウォッチの任務を監視するわ。会合を後日開くから」

「……感謝します、事務総長。必ず期待に応えてみせます」

「頼んだわよ、コマンダー」

オセイは自分の私的な関与を言葉で示すようなことはしない。私がしばらく間を置いて感謝の言葉を述べると、彼女はそのまま踵を返した。でも、その時にふと漏れた含み笑いが彼女の尽力を物語っていた。

着陸ベイにたどり着いた時、オセイの姿はもうそこになかった。エージェントたちもすでに出発準備を中断してる。それでも、彼らは私の命令を待ち続けていた。オーバーウォッチは変わった、より良き組織へと。私にはわかる……この先どんな試練が待ち構えてようと、このチームなら乗り越えていけるはずだ。

「みんな聞いて……良いニュースがあるわ」

